

三年間の矢音

一宮中・3 加藤 眞子

はじめて弓を握った日のことを
今でもよく覚えていて

胸の中で音もなく何かが始まった気がした
矢はまっすぐ飛ばず、腕は痛み、指は赤く染
まった

的までの道のりは遠く
果てしなく思えた

それでも、弓を引くたびに心は少しずつ澄ん
でいき

汗とともに流れる日々が、確かに自分を作っ
ていった

友達の笑い声、夕暮れの校庭に響く足音
誰もいない道場に残る弦の余韻

積み重ねた時間は、勝敗よりも深く私の心に
刻まれていった

大会の朝は胸が高鳴り、足は震えていた
矢を放った瞬間、音が遠のいた

結果は初戦敗退
努力は報われなかったのかもしれない
けれど涙よりも先に浮かんだのは

「ここまで来られた」
という喜びだった

的の中心には届かなくても、三年間を貫いた
矢は、確かに私の中に残っている

仲間と笑いあった道場の日々
悔しさに震えた夜

その全てが矢の軌跡のように
真つすぐで揺らぎない
勝利を手にはできなくても

続けられたことが誇りだ
三年間という時間が

私の努力を証明している
弓を置く今、心は晴れている
的に届かなくても

私の矢は未来に向かつて
まだまだ飛んでいける

ここで物語は終わらない
三年間の弓道は幕を閉じた

けれど胸の奥には、まだ余韻が響いている
道場で交わした言葉の数々
「もう一回打とう」

「まだ引ける」

その声に支えられ、私はここまで来られた

夏の夕方にまとわりつく熱気
弓を引くたび、額を伝う汗

冬の朝に白く曇る息
矢を拾いに歩いた土の感触

その一つ一つが

心の奥で宝石のように光り続けている

結果だけを見れば

努力は報われなかったのかもしれない
報われることよりも

報われるまで諦めず続けたことこそが
大切なのだと

勝ち負けだけを追い求めていたら
きっと苦しいだけ

でも私たちは笑いあいながら矢を放ち
悔しさを抱えたまま
次の日も弓を握った

弓道を通して学んだことは

矢の放ち方だけではない
努力の積み重ね

諦めない強さ
そして楽しむ心

これらがあったからこそ三年間続けられた
それが何よりの宝物だ